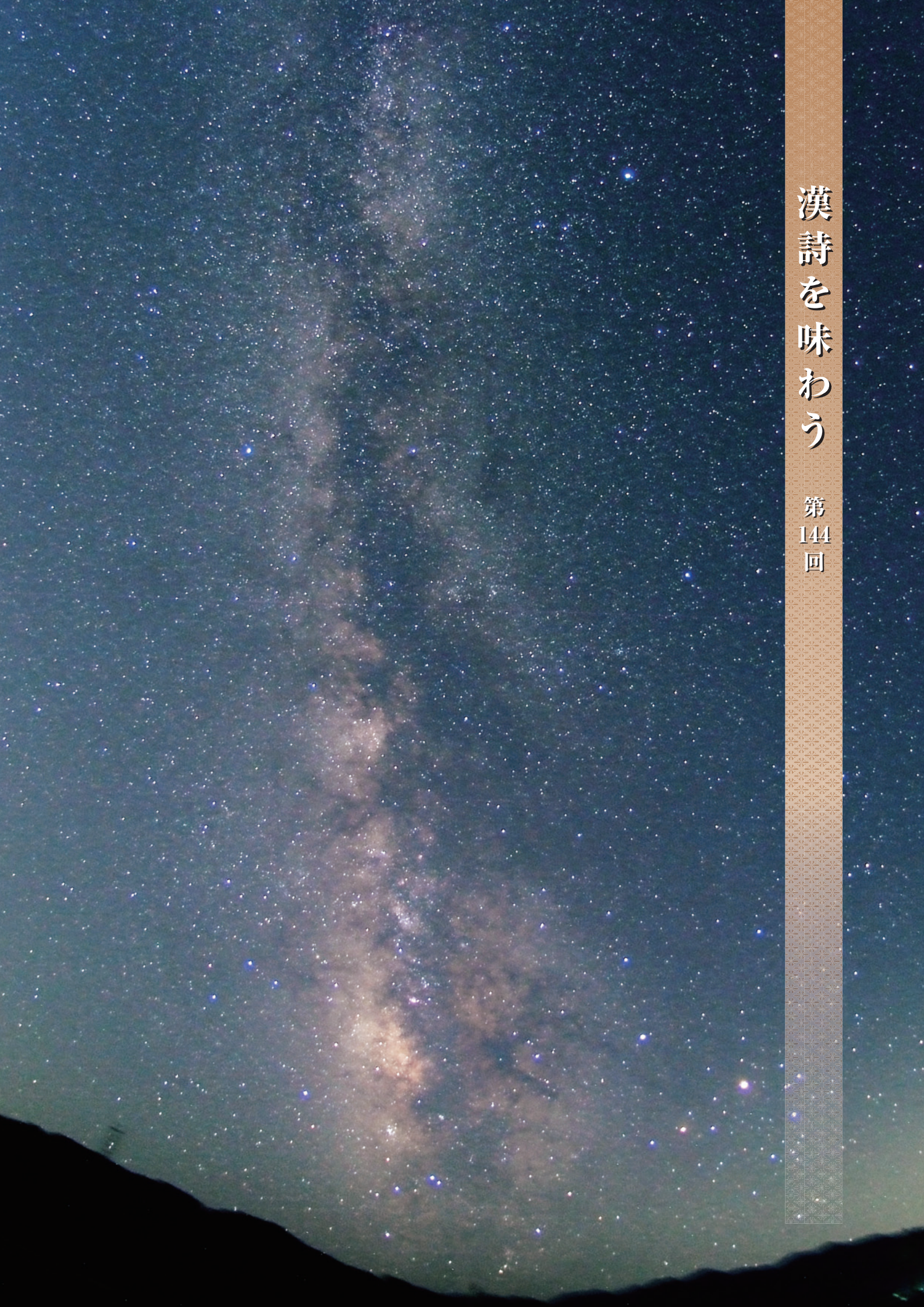


漢詩を味わう

第144回

秋夕　杜牧

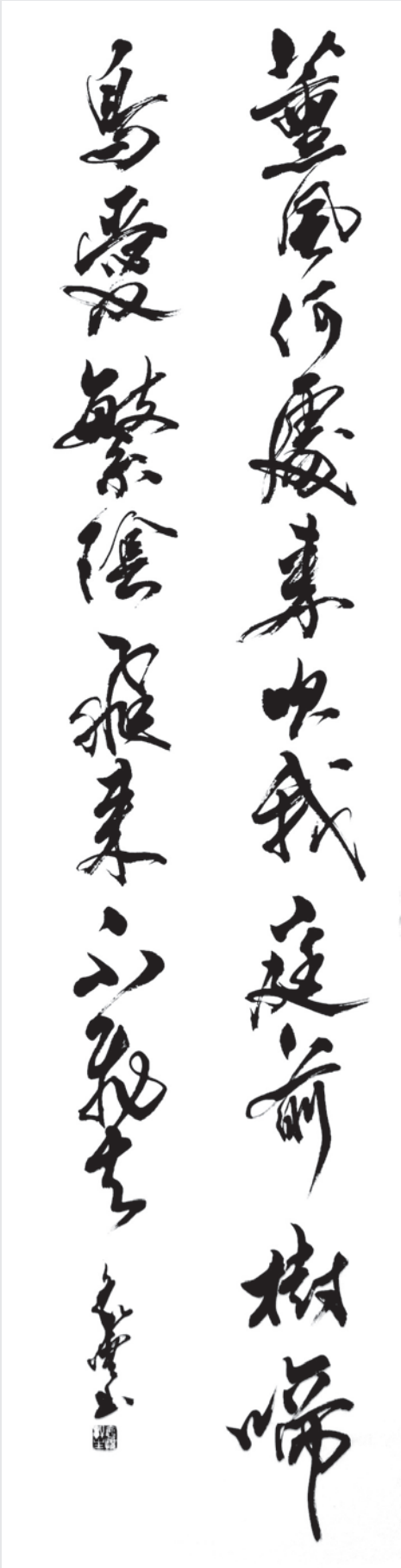
銀燭秋光冷畫屏　銀燭秋光　画屏に冷ややかなり
軽蘿小扇撲流螢　軽蘿の小扇　流螢を撲つ
天階夜色涼如水　天階の夜色　涼　水の如し
臥看牽牛織女星　臥して看る　牽牛織女星

銀の燭台にともる火は、すでに秋の色を帯びて、絵が描かれている屏風を冷たく照らす。
美しい人は軽い薄絹を張った扇で、流れ螢をソっと打つ。
天上界の気配は、水のように涼しい。
夜も更けて、身を横たえると、あの牽牛と織女が中天に輝いているのが見えた。

《秋　夕》七夕のこと。
《銀　燭》油ではなく、精製された蝋によって作られた高価はロウソク。
《秋　光》秋の風光。
《画　屏》絵が描かれている屏風。
《軽蘿小扇》軽い薄絹を張った小さな扇、あるいは丸扇。
《流　螢》飛び交う螢。

七夕は中国の五節句の一つで、天の川の両岸にある牽牛星と織女星とが年に一度、この夜に出会えるということから星を祭る行事となりました。中国ではこの日に「乞巧」と呼ばれる風習があり、若い娘たちが裁縫の上達を祈願したとされます。これが基になり七夕の夜には短冊にさまざまな願い事を書いて竹に飾るようになったと言われます。日本でも奈良時代から、神御衣を織る「棚機津女（たなばたつめ）」の信仰があり、中国の織女と共通点があり、日本では「七夕」を「たなばた」と言うようになりました。
ただ、現在の暦での七夕は季節が合いません。七夕はこの詩の題のように秋の季語で、秋の気配になって、空気が澄みはじめ星がくっきり見える初秋の夜空が似合います。当地の仙台七夕は、昨年は新型コロナウィルスの影響で中止となりましたが、例年八月の立秋前後に開催され、本来の七夕の時季といえるでしょう。
今回の詩「秋夕」を見てみます。銀の燭台、画の書かれた屏風、そして薄絹をはった丸扇という舞台に設えた小道具から、主人公は身分の高い女性であることが推測できます。宮殿の奥に住む宮女は、すでに天子の寵愛を失ない、燭台の火を目指して迷い込んできた螢と戯れて、やるせなく秋の宵を過ごしています。夜空を見上げればその気配は水のように涼しく、そして身を横たえると、あの牽牛と織姫が中天に輝いているのが見えます。年に一度の逢瀬を楽しむ夜に、二つの星を見ていると彼女はますます寂しさがつのります。
漢の班好「怨歌行」は天子の寵愛を失ったことを嘆く女性の扇の歌を作っています。「出入君懐袖　動揺微風發（君の懐袖に出入りして、ゆれ動いて微風を発したい）」。また斉の謝朓詩「玉階怨」では「夕殿珠簾を下し、流蛍飛びて復た息う、長夜羅衣を縫う　君を思いて此に何ぞ極まらん」と歌っていますが、杜牧はこれらを念頭にこの詩を詠んでいます。
七夕の陰暦七月七日にちなむエピソードは数多く残されています。漢詩にも多く取り上げられている題材で、三年前の本欄では白楽天の詩「七夕」を紹介しました。今月の「秋夕」はしっとりとした哀愁が漂う美しい詩です。

参考文献：唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・漢詩の辞典（大修館書店）・漢詩のこころ（時事通信社）



《大意》かんばしい夏の風がどこからか来て、我が家の庭先の樹木を吹き渡る。鳴き声をたてる鳥は茂った木陰を愛し、飛んできたまま飛び去ろうとしない。（于謙詩・偶題）

《大意》容貌と気性がすでに和らいでしとやかであれば、四肢五体もまた自然と安らかで暢びやかである。

読み　郷樹（きょうじゅ）　扶桑（ふそう）の外（君の故郷の木々は扶桑の国のかなたにしげり）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「送秘書官晁監日本国」

積水不可極
積水極む可からず

安知滄海東
安んぞ滄海の東を知らん

九州何處遠
九州何れの処か遠き

萬里若乘空
萬里 空に乗ずるが若し

向國惟看日
国に向って惟だ日を看る

歸帆但信風
帰帆 但だ風に信す

鰲身映天黑
鰲身 天に映じて黒く

魚眼射波紅
魚眼 波を射て紅なり

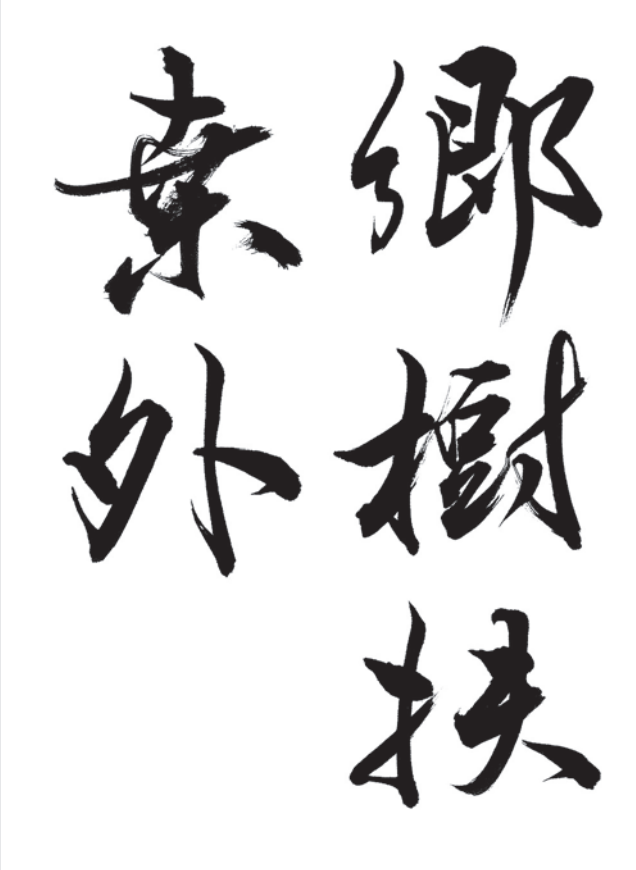
鄉樹扶桑外
郷樹 扶桑の外

主人孤島中
主人 孤島の中

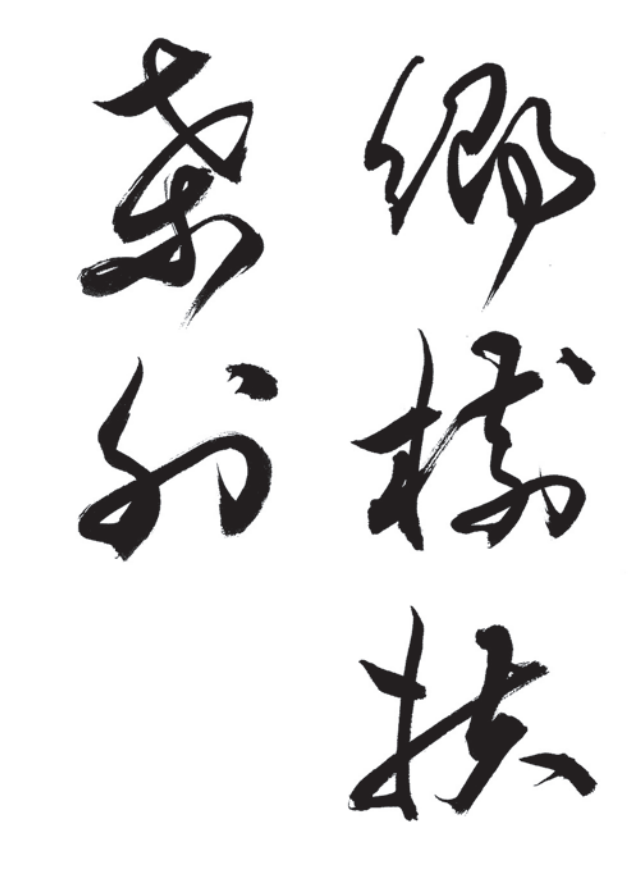
別離方異域
別離 方異域なりて

音信若爲通
音信 若為か通ぜん

行　書



草　書



※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書

次号課題

主人　孤島の中

ペン字部課題　（7月31日〆切）

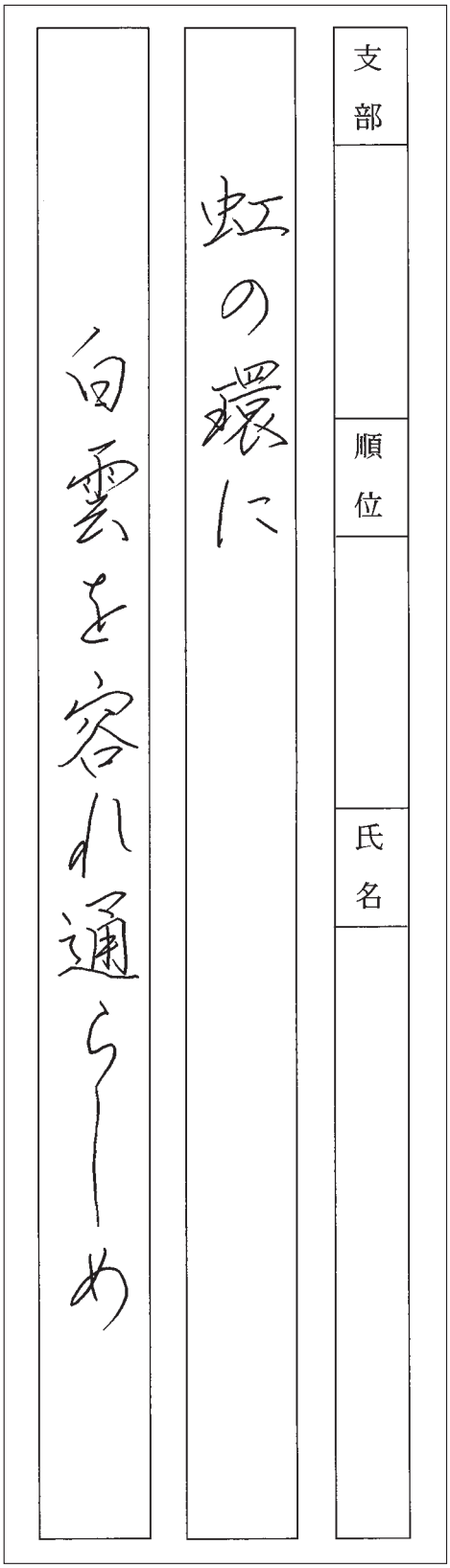
細字部課題　（7月31日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲　書

音　モウカトンソ　シギョヘイチョク

略解　孟軻は孟子のこと。敦素は、その性質厚くして素直な人であった。史魚（衛の国の人）は、少しも曲がらぬよい人であった。



山口誓子　和泉溪石先生書

君、独（ひと）り天意を見（あら）わし……

■禮器碑（らいきひ）（後漢・西暦一五六年）の臨書（25）

象雲臨

『君獨見天意』

後漢の桓帝時代、魯国の宰相韓勅は、曲阜の孔子廟を修理し、孔子の母を先祖とする顔氏と孔子の妻を先祖とする并官氏の租税と賦役を免除して恩恵を施しました。そして孔子廟の礼器がすべて整備されると甘雨が降って五穀豊穣となり、これにより国中の人々が遍く恩恵を受けたので、その功績を称え、後世にその名を伝えるために碑として残されたものがこの禮器碑です。

この碑は四面碑と呼ばれ、碑陽（表）と碑陰（裏）と碑側（左右両面）に文字が刻されていています。この書風は曹全碑とならんで八分隷の代表的なものです。しかし、清時代の王澍は「此の碑の書五節あり、体は凡そ八変す。」といい、碑中の書風が同じではなく書き手が違うような変化していることを述べています。詳しくは後日別稿としますが、大変興味深い点です。

然り而して天地……

象雲臨

■王羲之・集字聖教序（唐・西暦六七二年）の臨書（10）

『然而天地』

本碑は太宗が経典を中国に持ち帰った玄奘のために撰した「大唐三蔵聖教序」と、玄奘の謝表（感謝を表した文）に対する手勅（皇帝自身で書いた詔）、高宗の「述三蔵聖記」と玄奘の謝表と手勅。そして玄奘の新訳になる「般若波羅蜜多心経」からなります。以前にも述べましたが、集字に際して王羲之の書蹟に必要な文字がなければ文字の偏旁を入れ替え組み合わせたり、大小の不均衡を調整したりして文字を新たに作っています。そのため、完成までは序記の成立から二十四年の歳月を要しています。字数は全てで一九〇四字ありますが、重複している文字を除けば約八〇〇字余りです。今月の「天・地」も何回も登場しますが、「而」に至っては全文中三十九字あります。これらは一字ごと異なった字を使うことは無理で、数種の字体を繰り返して使っています。